

-第 93 回 IRIDeS オープンフォーラム- 2025 年度 災害レジリエンス共創研究報告会を開催しました (2026/7/24)

テーマ：災害レジリエンス、災害デジタルツイン、ヒューマンレジリエンス、共創・連携

会 場：オンライン

URL：<https://irides.tohoku.ac.jp/event/irides-forum/irides-forum2026/20260724.html>

2026 年 7 月 24 日（金）、「2025 年度災害レジリエンス共創研究報告会」をオンラインにて開催しました。本報告会は、災害研と学内外の研究機関との共同研究の成果を発表する場として、毎年 7 月に開催している恒例のイベントです。

開会にあたっては、江川新一センター長より挨拶がありました。この中で、センターの創設からの 5 年間、「災害レジリエンス共創研究プロジェクト」からは数多くの研究成果が生まれ、社会実装や論文発表へとつながってきたこと、その一方で毎年新たな研究課題が加わり続け、共創の枠組みは今なお広がりを見せていることが述べられました。また、学際的・分野横断的な共創研究は、それぞれの研究分野の強みを活かし合うことで新たな視点やアイデアを生み出し、災害科学としての発展を後押しする力を持っていること、本報告会もまた、そうした広がりへのきっかけの一つとなってきたことにも触れられました。

災害レジリエンス共創センターは、「総合知」を活用しながら災害による社会の機能損失を低減し、速やかな回復とより良い復興を実現する「災害レジリエンス」の向上とその社会実装を理念として掲げています。「災害レジリエンス数量化」「ヒューマンレジリエンス」「災害情報キュレーション」「災害レジリエンス共創」の 4 つの重点研究領域のもと、シンボルプロジェクトとして「災害デジタルツイン」および「災害データバンク」の構築を進めています。

続いて行われた口頭発表では、2025 年度に実施された 49 の研究課題について成果報告がなされました。各課題 13 分（発表 10 分、質疑応答 3 分）の構成で、ホール A・ホール B の 2 会場に分かれ、午前・午後にわたって行われました。参加者からは「様々な分野からの発表があり勉強になった」「さまざまな視座から研究を捉え直すことができ有益だった」といった声が寄せられました。

閉会にあたっては、越村俊一所長より、当日発表された研究成果の一つひとつが「総合知」の源泉となっていることへの謝辞が述べられました。なお、災害レジリエンス共創センターは時限付きの組織であり、本報告会は来年度（2027 年 7 月 23 日予定）が最終回となる予定です。

当日は、今野公美子特任准教授（広報室）が司会を務めたほか、IRIDeS オープンフォーラム WG（高橋尚志、川内淳史、林宏典、蝦名裕一、佐々木宏之、富田史章、乗松君衣、岡田悠太郎、猪狩暢子、齋藤由美子、高橋利恵子、広報室、武田百合子）が運営にあたりました。

文責：武田百合子、江川新一（災害レジリエンス共創センター）
（次頁へつづく）

東北大学 災害科学国際研究所
第93回 IRIDeSオープンフォーラム

2025年度 災害レジリエンス共創研究報告会

2026年7月24日（金）9:00～17:00

一般参加の方はカメラ・マイクとも「OFF」に、
報道の方は表示名に【報道】をつけてご参加をお願いします。

オンラインにて開催しました

第93回IRIDeSオープンフォーラム
2025年度災害レジリエンス共創研究報告会



参加申込はこちらから
※切:7月22日(水)12:00



**オンライン
報告会を開きます**

開催日時 2026.07.24(金) 9:00～17:00
8:55 開場

<Zoom会議場 ホールA>
9:05 災害デジタルツインの開発に関連する研究
10:25 災害データバンクの開発に関連する研究
11:15 人流データを活用した社会動態の解明に関する研究
13:15 災害レジリエンス数値化研究
14:05 災害情報コミュニケーション研究
15:15 ヒューマンレジリエンス研究

<Zoom会議場 ホールB>
9:05-16:10 災害レジリエンス共創研究

【問い合わせ】
災害レジリエンス共創センター
Email: resilience-office@grp.tohoku.ac.jp
TEL: 022-752-2112

共創研究報告会ポスター

プロジェクトの概要・構成

永久凍土の融解が引き起こす土地の変形・浸水被害などによる住居環境被害や、融解によって開放される物質（過去に閉じ込められた水や微生物）による住民健康被害を、Slow-onset disasterとしてとらえる。北極域の気候課題への対応枠組みを災害科学に拡大し、理学知・疫学知と人文知の融合によりリスクを把握し、北極域住民の気候変動適応、災害レジリエンスや防災に資するリスクコミュニケーション法を、日米共同で模索する。

ACCS
ARC Center for Arctic Studies

- 保健学、看護学（リスクコミュニケーション）**
中野久美子 東北大学医学系研究科 保健学専攻 助教（代表）
武田多聞 東北大学医学系研究科 研究員／東北大学病院 看護師
- 地球惑星学、人工衛星観測**
岩花 剛 アラスカ大学フェアバンクス校 国際北極圏研究センター 准教授
（北海道大学 北極域研究センター 特任教授 兼任）
- 凍土内の微生物・環境環境・古環境解析**
Galipan Josephine 山形大学理工学研科 准教授
内田昌男 国立環境研究所 地球システム領域 主幹研究員
- 地理学・地誌学、災害人文学、Slow-onset disaster研究**
藤 裕太 東北大学災害科学国際研究所 助教（PJ受入）

Case 1: Tohoku after the Great East Japan Earthquake, tsunami and nuclear disaster



- More than 15 years after the Great East Japan Earthquake, the Tohoku region offers one of the most institutionalized memory landscapes.
- 348 disaster memorial facilities, including 73 museums, exhibitions and other disaster heritage sites (Densho Road 2026).
- Formal and informal oral history practices, such as kataribe practices, are embedded in educational tours.
- Educational tourism as part of disaster activities



ホール A・ホール B の 2 会場に分かれて
49 の研究課題の成果報告を行った